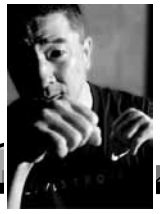
ノックアウト・ムービーズ
私をKOで打ちのめした映画



著者：Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 24

『オール・ザ・キングス・メン』
（All The King's Men 1949 年
ロバート・ロッセン監督）

数あるボクシング映画の中でも初期の金字塔と言える『Body And Soul』（1947）の監督ロバート・ロッセンは元ボクサー。その骨太の社会派ロッセンが 7 部門でアカデミー賞にノミネートされ、見事に最優秀作品賞他 3 つのオスカーに輝いたのが『オール・ザ・キングス・メン』

政界の内幕を描くパワー全開の作品からセリフを拾ってみると …
「皆さんのお金（税金）を盗む議員や役人たち盗っ人は、私腹を肥やす」「福祉は嘘。実際は役人の福祉の向上」「癒着企業の経営者は役人の親戚」

やられ放題の市民に関しては …
「田舎者には良識がない。田舎者諸君、皆さんは役人になめられてる」「市民の意思が法になるべき。要望は正義に」「闘う勇気を持ち、権利と意思を阻む悪は叩け」

マスコミは …
「真実を書かない。クビになるから」「民衆が賢くなると困る」「新聞もラジオも政府のペットだから、彼らの悪事は誰も知ることがない」

腐敗に挑む男は …
「報道を曲げる連中と役人達を一掃する。彼らがブタのようにわめいても市民のために」
「金持ち連中の脂肪を吸引してやる」「苦しむ人達の誰もが利用できる病院を作る。治療は無料」「生産物を市場に運ぶ際、通行料は無料」「貧しい民から土地や農場を没収することもない」「皆さんから希望を奪わない。それこそが真の権利だ」「子ども達には正しい教育の権利を」

貧困について …
「目を凝らして現実を見つめるんだ。貧困の苦しみが現実だ」「貧しい人を救うのは貧しい人だけ。金持ちや役人じゃない」

公務員をサッサと辞める教員は …
「人から盗んだお金で建てた学校では教えたくないの」と稀有な正義のセリフ。現実は全員そこにしがみついてる。

善人ぶる一般市民には …
「善人なら、真実を隠さないはずだ」と真実を隠しまくる大多数の虚偽を指摘。

民主主義のごく当然なことがセリフに並んだだけでも、アカデミー最優秀作品だろうが非民主主義地帯（日本）では上映禁止。かろうじて、1976 年に意識の高い岩波ホールで上映されたが、往年の社会派映画を東京水道橋まで観に出かける意識の高い人は、ほんの一握りだから、世には知られていない。

主演のブロデリック・クロフォードが主演男優賞を獲得。ブロデリックやアーネスト・ボーグナイン（1956）やアート・カーニー（1975）のように男前でもなければ、売れっ子でもない役者が主演賞を得る時はアカデミーもちゃんと選んでる。

ベトナム戦争他の侵略戦争を支持したタカ派のジョン・ウェインは、最初にこの主役オファーを受けた時に「アメリカ的な役じゃない」と蹴っていたから、地味な俳優ブロデリックがオスカーに輝いたのが、とても悔しかったらしい。その後、オスカー獲りに躍起になったジョンは多くの空振りを繰り返した。

印象深いマーセデス・マッケンブリッジは、アカデミー助演女優賞を得たが、映画の主人公のような散々な人生をおくった。のちの硬派監督ロバート・アルドリッチが助監督を務めていて、アルドリッチ独特のカラーがここからスタートしている。

黒澤明監督作『悪い奴ほどよく眠る』（1960）が本作の影響を受けている気がするが、非公開作品を黒澤さんが観ていたかどうか。傑作『悪い奴ほど』のように政治腐敗を暴く作品が日本にはほとんどなく、無意味な映画が大量生産される。人の羊化は順調。『オール・ザ・キングス・メン（みんな王の子分）』の題名の如く、見事に支配され、『悪い奴ほどよく眠る』から、政権は好き放題、やりたい放題。

(Lucky Day)

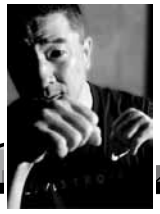
▲ アカデミー主演男優賞と助演女優賞を獲得

▲ ロッセン監督も赤狩り委員会にいじめられた

▲ 最優秀作品賞を受賞したロッセン監督

This is the original version of the article carried in Vancouver Shimpo. © Lucky Day. 2017 All Rights Reserved.

ノックアウト・ムービーズ
私をKOで打ちのめした映画



著者：Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 25

『マーサのレシピ』
Mostly Martha
（2001 年 ザンドラ・ネッテルベック監督 ）

子どもを理解しない人に幸せは来ない。

子どもを理解できない人は心がない。

子どもを理解することは、愛すること。

… どおりで冷酷な無表情ママが子どもたちをあちこちの塾に引き廻し、休憩時間も車の中でも常に学習帳を広げさせる。看守は子どもの自由と幸福を奪っていながらも、それが正しいと信じている。子どもの表情が明らかに異常になっているのに、化け物と化したママたちは、それも感知しない。ママたちの人相は「あたいに何も言うんじゃないよ」という苛立ったニシキヘビ。非人間な教師達からの反人権な分量と無意味な中身の宿題を強制されているだけで、子ども達の心は破壊されているのに。

『マーサのレシピ』に主演のセルジオ・カステリットには同作撮影直後にイタリアで会った。『グラン・ブルー』やトルナトーレ監督の『明日を夢見て』(1995) 等多くの作品に出演していて、顔と同様に手足の長い紳士セルジオは、イタリア、フランス、ドイツなどで活躍する典型的ヨーロピアン役者。人はよく「国際交流」「インターナショナル」と大げさに言うが、本当の国際交流とは、国なんぞ意識しないこと。小さいところに住む小さい人間は「あの人は、となりの町から来てるから違う」とか「ここは二丁目だから、一丁目のうちは関係ない」みたいな判断基準。子どもを理解する役を演じたセルジオからは、役どおりのおおらかなキャラクターを感じた。私の出逢ったローマ生まれの人は、みんな人間が深い。小さい町のゲジゲジとは別の生命体。

映画は 9.11 事件からちょうど一年経った 2002 年 9 月 11 日、ワールドトレードセンターからほど近いアンジェリカシアターで観た。今の主流になっちゃった爆発、銃撃、CG だらけの大型ゲームみたいなお祭り映画や、無意味なナンセンス映画じゃなく、ちゃんと魅せる作品を観せる劇場。9.11 犠牲者追悼式を終えたその日は、特に 1 年前のことを考えていた。あの煙と異様な臭いは忘れられない。映画の主人公 2 人の相容れない性格が同じ職場を共有する同作品の設定は世界の象徴。自分が正しいと信じ、自分を通し、自分を優先し、相手を拒否する限り、溝は広がり、やがて壊滅する。

「その人の靴を履いて歩いてみなきゃ何もわからない」ということわざは、とてもいい。通常は「相手の立場になって …」と言うが、それよりももっともっと相手の人生を生きる意味になる。靴は境遇や職業によってまったく違うから。貧困に生きる人がペタンコにしたペットボトルにヒモをからめてサンダルにしてるのを見たことがある。それを履いて歩かなきゃ理解は無理なのに、靴には見向きもせずに人に有罪宣告する。えん罪を被るのは無抵抗な人たち。そういう意味で大半の人は日々、身近な人にテロ攻撃を加えている。他人より自分を優先している限り。テロリストは、どの町にも、どの学校や職場や家庭にもいる。

石頭は世界の害。「旅をしない田舎者 (自分の町に引きこもる人) は無知」という定説は正しいけど、正確じゃない。世界を旅しない人は無知どころか「大間違い知識の宝庫」、つまり偏見の固まりで、世界の公害兼脅威。国境を越えなきゃ、全部自分の都合。特定の国を敵視する人は典型。大部分は、その国に友だちがいないどころか、行ったこともない。友人がいない国や団体は全部悪いと人は決める。海外経験がなく、外国に友達がいない人ほど人種差別のかたまり。

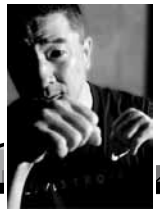
子どもは元々、国境意識はないが、大人たちの洗脳レシピで差別者にされちゃう。どうして大人はしょうもないことを子どもにやらせる？しょうもない人間だから。

どうしてしょうもない人間？しょうもない生き方だから。どんなレシピで煮ても焼いても食えないからこそ、子どもたちを救わなきゃ。

(Lucky Day)

This is the original version of the article carried in Vancouver Shimpo. © Lucky Day. 2017 All Rights Reserved.

ノックアウト・ムービーズ
私をKOで打ちのめした映画



著者：Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 26

『サウンド・オブ・ミュージック』
The Sound of Music
（1965 年 ロバート・ワイズ監督）

2008 年 10 月、足を踏み入れた教会の壇上に上がる石造りの階段は奥行幅が広くゆるやか。中央の通路や両側の柱、窓　　彫刻を眺めながら、それまで 2 週間探し続けた『サウンド・オブ・ミュージック』の撮影地巡りの最終日。10 度目くらいの翌日のパリは、その時、一番色あせて見えた。そのくらいザルツブルク周辺は美しく、ワイズ監督が選んだロケ地は見事だった。5-6 分で一気に流れる「ドレミの歌」のシーンだけをとっても 40 キロ南の山頂、30 キロ北の湖、遥か彼方の登山トロッコと数秒のカット毎に移動しまくった結果が映画史上に残る名シーン。教会ではセリフひとつない、しかしもっとも多くを語る結婚式シーンが撮られた。そのシーンでの尼僧たちの表情は愛そのもので、おっかないママゴンたちの正反対。

撮影地観光ツアーに加わるのはみっともない。自力で探さずに、宝物を見つけて感動？ちょうどその年に市内の人形劇場で『サウンド ..』ショーが始まり、これも見事だった。しかし映画公開から 44 年も経って、やっと人形劇？大傑作だが、地元の若者から中年、老人まで全員「観てない」と。当地では『菩提樹』(1956) が同じ物語を描いた代表作であって、アメリカ人が多いに脚色した『サウンド ..』は関心外。ちょうどハリウッド作品『Mishima』『ザ・ヤクザ』『Shogun』などを観た日本人は稀なように。それが幸いして、どの撮影地も特別扱いされず、ほぼそのままの自然体で残っている。ドレミの丘は私有地のため番犬に吠え立てられた。そこから数分のところに住む人達も、そこがロケ地とは知らない。"映画〇〇の撮影地！"と金目当ての欲張り達が群がる社会と違って、人が質素。

ナチスの本拠地ミュンヘンからザルツブルクに向かう景色は圧巻。山々が美しければ美しいほど、闇のファシズムが醜い。壮大な自然を長々と見せるオープニングについて「主人公マリアの生命力は、この自然抜きに語れない」とワイズ監督。

「修道院は逃げ隠れする場所じゃない。問題に立ち向かいなさい」とマリアを諭す院長がいい。人は家や職場等に逃げ隠れしている。「これは家族の映画」とマリア役のジュリー・アンドリュース。家族を破壊するのが軍国主義。家政婦として訪れた家族の父親は大佐で潜水艦のキャプテン。塾から塾に引きづり回すママみたいに自分の 7 人の子どもにユニフォームと番号を付けて、ピッピーッ！と耐えがたい笛で行進させる日本流。「人には名前があるのに、猫や犬じゃない」と抗議するマリア。彼女が大佐を呼ぶのに試しに笛を使うと「キャプテンと呼べ！」と怒る軍人は「子どもが遊ぶのは無駄だ」と言い切る。彼と同じ考えの「子どもを東大に入れたい」的親が大増殖。

「すべての人間の行動を知るのが務めだ」と、ウロつくファシストの手先については「ああいう連中とは適当につき合うしかない。騙されてるのがわかってないんだ」とのセリフは「つける薬はない」という意味。十代の少年が洗脳されたように、悪は教育を濫用。日本も今、全国民に羊のように番号がふられた。

［オーストリア黄金期の最後］との見出しで始まる本作は、世界共通の軍国政権による破壊を示唆。ラストシーンでは遠くの尾根にヒトラーの隠れ家を見せているが気づく人はまずいない。私も秘密トンネルをくぐり、その隠れ家に行って、監督の意図がやっとわかった。ヒトラーの生家は 2016 年に取り壊された。二度と独裁者を産まないために。

ハマリ役 J・アンドリュースについて「彼女は私たちのせいで何度再テイクになっても決してイヤな顔せずに笑顔で優しかった」と子役だった共演者たち。

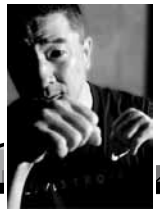
The Sound of Music（音楽の調べ）が人間愛の象徴。愛が薄らぐ人類に「愛しなさい！」とうったえる宝石のような作品。

(Lucky Day)

▲ 実際のフォン・トラップ・ファミリー

This is the original version of the article carried in Vancouver Shimpo. © Lucky Day. 2017 All Rights Reserved.

ノックアウト・ムービーズ
私をKOで打ちのめした映画



著者：Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 27

『美女と野獣』
Beauty and the Beast
（1991 年 ゲーリー・トゥルースデイル & カーク・ワイズ監督）

甘ったれで、わがままで優しくない…

それが王子が野獣に変えられちゃった理由。この冒頭でのナレーションをオーディエンスは軽視している。正確に言えば、まったくわかってない。わかってたら、平然と生きてられるはずがない。だって「甘たれ」で「自分勝手」で「優しくない」の全部、またはどれかが、ほぼ全員に当てはまるから。

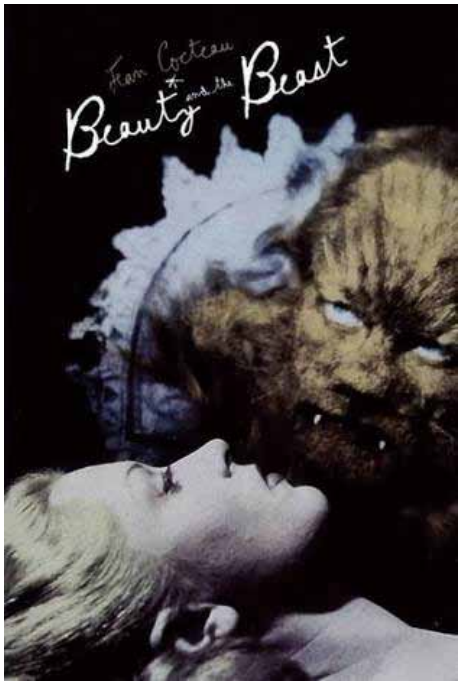
働く住民からガッポリと年貢を巻き上げ、ハチミツの風呂にドップリ。豪華な城でのうのうと暮らす連中は、税金に寄生するぐうたらたちの象徴。魔法で化け物にされても、それは本性が出ただけ。化け物なりに、おしゃれとメイクアップを重ねる公務員おばさんたちが闊歩する。元に戻る努力はせずに、ただ化け物として、ひたすら日めくりをめくる彼らのヒットナンバーは【人間に戻りたい♫】… 中身を改善せずに外見を塗りたくり、悪化一途の「愚女と怪獣」や「野獣と野獣」カップルで世界はにぎわう。

どうすれば、人間に戻れる？答えは【愛することを学んだ時】.. 映画ではハッピーエンドのため、愛することを学ぶが、現実はほど遠く、支配者はわんさかと私腹を肥やし、地球を滅亡に導く。原作者のボーモン夫人の 250 年前の警告もまったく届かず。原発、放射能による壊滅のずっと以前に人間愛は崩壊済み。若者の一番人気の就職先は寄生虫（公務員）とくるから、未来は闇。ギリシャの経済破綻は 4 人にひとりが公務員に成り果てた結果。

税金泥棒に反発するどころか、権威に媚びてヘーコラ、ヒーコラの市民のことを主人公のベルは【役立たずの田舎者♫】とし、一切の変化を拒絶する村社会を【世界はこんなはずじゃない。もっと素晴らしいはずよ♫】.. どうして汗する市民もこんなにダメ？自分の街に染みついて生きるシミには教養がないから。そして何より自分勝手だから、社会正義は関係ない。街で唯一クリエイティブで創造力に富むベルと父親は、無教養な村民からは変人扱いされ、ノンクリエイティブな村民は、きのう（過去）とまったく変わらないきょう（未来）を繰り返す。同じ日々を重ねる者は、新しい考えを封じ込め弾圧。放射能屋に雇われてるハイエナ同様、街を操る権力者に金でウソをつくニセ医者も登場。

思い上がりで、自分は賢くカッコいいと信じてる大バカ者ガストンのキャラクターが面白い。自分が正しいと信じるすべての人間の化身が彼。もちろんオーディエンスは、それが自分だとはこれっぽっちも思わないが。

原作者 Jeanne-Marie Leprince de Beaumont (1711-1780)



『美女と野獣』（1946 年版）

ニューヨークのブロードウェイで、ショーの終了時にガストンが毎回得る大きな拍手の半分には観客の自省が込められているのを感じる。他の町での拍手は違う。田舎者ではなくクリエイティブなニューヨークの観客層は理解が深い。

知られていないが、天才アーティスト、ジャン・コクトーが監督した 1946 年版『美女と野獣』は傑作。コクトーが暮らし、執筆したフランスの海辺の小さなホテルに筆者は何度も滞在した。彼のデザインした教会、結婚式場等を訪れるとコクトーの魔法の扉を開けられる。原作に近い幻想的かつ繊細な映画を作れるのは、人間であり続けたコクトー以外にいない。

人間に戻れるようにと、自分勝手な怪獣たちのために作られた『美女と野獣』を各家庭の粗大障害物や珍獣にも観てもらいたいが、手遅れか？

（Lucky Day）

This is the original version of the article carried in Vancouver Shimpo. © Lucky Day. 2017 All Rights Reserved.